

**資源環境経済学特別演習Ⅱ 議事録**  
**2013年度 第2回**

|  |               |               |                    |
|--|---------------|---------------|--------------------|
| <b>報告題名：「親族関係に見るソロン・エヴェンキの社会変容」</b>  |               |               |                    |
| <b>報告者</b>   | <b>ナスンムンク</b> | <b>日時</b>     | <b>5月23日 午後3時～</b> |
| <b>所属分野</b>  | <b>国際開発学</b>  | <b>場所</b>     | <b>第2講義室</b>       |
| <b>座長</b>  | <b>江守 智夏子</b> | <b>議事録担当者</b> | <b>藤井 隆太</b>       |
| <b>出席者</b><br>長谷部、木谷、安江、小山田、盛田、米倉、冬木、高篠、伊藤、石井、鈴木、スチン、タンボウニ、山口、カライ、趙、U-Nichols、Belly、Cahyo、Tomi、Heldi、井上、佐々木、志賀、西田、朴、Thunyamai、オウキエイ、渥美、江守、小田嶋、金、藤井、町田、畠山 |               |               |                    |

## 報告要旨

本研究は、内モンゴル自治区エヴェンキ族自治旗のエヴェンキ社会を研究の対象とする。エヴェンキ族は、シベリア原住民の一つだったといわれており、「エヴェンキ」と自称している。エヴェンキとは「山の奥に住んでいる人」という意味である。

本研究で扱うソロン・エヴェンキは(中国領内のエヴェンキ族をツングース・エヴェンキ、ソロン・エヴェンキ、ヤクト・エヴェンキと3つに分類している)、17世紀前半に、清朝の国境を守る政策で現居住地の周辺地域に移住させられた。この結果、彼らの生業は狩猟から遊牧に変更され、かつ遊牧地域が限定された。その後からエヴェンキはモンゴル族やダグール族と混住し、モンゴルと似た遊牧をしてきた。1980年代から内モンゴル各地域では、中国政府の牧草地の請負制度により定住牧畜が始まり、現在に至った。

エヴェンキの歴史を遡ってみると、今までに国を建てた歴史はなく、その社会を支えていたのは氏族制度であった。『文化人類学事典』(石川栄吉など、1994年)によれば、氏族とは第一に神話、伝説上仮定された出自によって組織された社会集団である。父親又は母親を通じてたどる単系出自で、族外婚をとともなう社会集団である。平等対等な原則を持つ、軍事的・宗教的・経済的組織であるとされる。ロシア領内のエヴェンキ社会を考察したトゥゴルコフは、エヴェンキとシベリアの他のいくつかの少数民族の間では1920年代まで氏族制度が保たれていたといい、エヴェンキ氏族社会に父系または母系氏族があったとしている(トゥゴルコフ、1981年)。他方、内モンゴル(本研究の対象地域)では、1960年代まで氏族制度があったといわれている。国立民族博物館の佐々木氏、客員研究員だったカリナ氏は主に内モンゴル自治区、黒竜江省にいるエヴェンキ、オロチョンの社会の伝統的狩猟について報告し、父系血縁関係による氏族社会の特徴を見せていたという(カリナ、2012年、「エヴェンキとオロチョンの伝統的狩猟」)。しかしながら既存研究のみでは父系氏族だったのか母系氏族だったのか或いは両方あったのか、また氏族社会の成り立つ構成が詳細に報告されているわけではなく、これらの記述では実態がつかみきれない。ましてや定住化、経済発展、資源開発とともに急速に変化している社会であり、その対応と変化状況を彼等の生活実態から解明し、記録を残すことが喫緊の課題である。このような問題意識を持ち、筆者は2012年8-9月に、内モンゴルにあるエヴェンキ牧畜民が居住するムラを中心に現地調査を行った。牧畜民にインタビューを行い、彼等の日常活動、生活様式、親族関係について観察した。そして、本研究ではエヴェンキ社会の実態を地域概況、ジューの機能、親族関係(モホン)、の面から検討する。特に現在のソロン・エヴェンキ社会の基礎組織として機能するジューに注目して検討する。ジューとはエヴェンキ語の住む「家」を指し、本研究では、夫婦とその子供たち、孫や曾孫たち、または彼らの結婚相手を含む大家族を指す。

ジューは生産協力単位であると同時に出自集団としての特質も認められるとすれば、どのような原則によって構成されるのであろうか。本研究で明らかになった点を整理すると、(1)ジューの中の子供が父方のモホン(氏族)を継承し、帰属する傾向がある。しかし父系制といえる明確なルールは観察できない。母方継承もあったが同じく母系システムの明確なルールは観察できない。(2)従ってモホンへの帰属が父方か母方か一方に生得的に定められるとは言い切れない。第三者が帰属を確認できるのは本人や周辺の者が系譜関係を踏まえてどう認知するかによる。(3)エヴェンキの親を持つ者は片親であっても子供はエヴェンキ族とみなされ、エヴェンキのモホンの成員とされる。(4)モホンは成員であるか否かを系譜関係から推定させるものではあるが、単系の出自集団としての実態を確認できない。(5)ジューは父母双方のモホンが交錯するところで形成されるというよりも少なくとも一つの性のつながりを通して出自上の地位が得られるキンシップと、これを核にキンシップのない他民族を加えたのである。経済活動を行う複数の世帯からなる機能集団或いは生活協力単位となっている。この意味で、ジューは一つの人格をもつかの様な共同行動を取る団体的出自集団(corporate descent group)と言えよう。

エヴェンキ族のステータスを持たない民族との通婚が進みつつある現在、キンシップのない部分即ち他民族がジューの構成員としてさらに拡大しつつある。他民族との通婚を繰り返しつつも、エヴェンキとしての社会集団を維持してきたのは、通婚によって生まれた子供たちがエヴェンキの片親のモホンの成員権を得られる弾力的なルールがあるためともいえる。しかし、量的変化がいずれは質的な変化をもたらす、ジューの構造が変質していくことは十分考えられる。

## 質疑・応答

**江守**：村と都市の二重生活はどのようにして行われているのか。

**慧慧**：村と都市の二重生活が起こる原因は二つある。一つ目が教育。ムラに中国語の学校がないため、都市に行かないと教育を受けることができない。二つ目が経済成長によるもの。土地の徴用によって得られた補償金で都市にマンションを買っているため二重生活が生じる。その時、家族みんなが都市に移動するのではなく、学生とその人の面倒を見る人が都市に行き、他の人はムラで牧畜を行っている。

**伊藤(房)**：①調査を継続しエヴェンキのアイデンティティをどういうふうを設定するか。②農業との関係をどのように研究していくか。③C ジューとそれ以外のジューの共通性があるとすればそこから何が言えるのか。

**慧慧**：①エヴェンキのアイデンティティの維持には氏族の関係が関わっている。②今まではジューという単位での牧畜協力だったが、どういう範囲の農業へ、また共同の利益の中にどういう人が入ってくるかを研究したい。③団体的出自集団は一つのジューだけでは見えないので他のジューも調べる。そこに共通性があれば、ジューは出自をたどれるものと言える。もしなければ、C ジューの氏族を成り立たせているのは何か、という問題になる。

**伊藤(房)**：エヴェンキが何を想うかをまとめると共通性が見えそれがアイデンティティにつながる。家畜の形態がモンゴルなど他と違いを整理した方がいい。

**米倉**：補足ですが。エヴェンキは数が少なく外からの変化が多いため消滅しそうである。アイデンティティを確保できる仕組みとしてジューは最後の砦になっているのではないか。その仕組みには組織的な実態が必要でそれがジューである。モホンは精神的にはアイデンティティを確保できるものだが実態のあるものではない。ジューを観察することでエヴェンキの維持につながる。地縁的な集団ができているのか、また地縁的集団への移行の過程をとらえてほしい。